

†

2022 年

9 月 第 1・2 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 9 月 4 日 : マタイ福音書 18 : 1—7 .

『 神の国 (天の国) の一員 』

・ 9 月 11 日 : マタイ福音書 18 : 10—14 .

『 それぞれの羊 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

ある日のこと、天の国では誰が偉大なのかと白熱した議論を繰り広げている者たちがいます。この、たわいもない者たちこそ、イエスの弟子たちでした。ちょうどその時にイエスの近くに一人の幼子がありました。1世紀の中東では6歳になるまでに幼児の3人に1人が命を落としましたから、この子は、いわば古代社会では宝物です。イエスはその子を彼らの中心に立たせて、このような無垢な幼子こそ天の国に入ることができる、と断言します。自分自身を低くして、イエスを信じて疑わない子供のような者こそがその該当者なのだと。もちろん信じられる側のイエスは誰がご自身のことを信じているのかはお見通しでした。

イエスを信じることは、神を信じていることに他なりません。その人が信じて救われるために。

さて、イエスの目の前には天の国における序列がどうしても知りたい愚かな弟子たちがいます。彼らは、幸いにして幼子を躓かせることまではしていませんが、イエスは彼らに何かを気づかせようとしています。

そもそも天の国で一番偉いのはそこの元首である神ですが、なぜか弟子たちはそのことさえ失念しており、人間中心の領域をイメージしていたようです。

さて、誰が偉いのかはともかく、先ず、そこにいったい誰が入れるのが問題です。イエスはその答えとして、純粹無垢な「幼子のような者」に「入国」が許可される旨を既に弟子たちに明かしましたが、合点が行ったかどうかは最後まで不明のままです。

さらに、驚くべきこととして、天の国で一番偉大な者もやはり「幼子のような者」であることを教えます。どうてい弟子たちには受け入れ難い天の真理です。

天の国は別名、神の国といいます。天の神の支配領域を表す言葉ですが、そこには天と地の区別はなさそうです。人が、純粹無垢な幼子をイエスの名によって受け入れる場があるならばそこも神の領域に属します。昨今の問題だらけの保育園とはわけが違います。

その領域では大人たちでさえも幼子に倣って自分自身を低くすることが求められます。理解不能に陥っている人類を、そこに連れ戻すことが、世を愛され、その独り子を賜った神様のなすべき務めなのです。

百匹の羊がいて、そのうちの一匹が迷い出たなら、さあどうしようというお話です。天の父なる神の意思はその一匹がそのまま失われることを望まないし、残りの九十九匹を山にとり残してでも、迷い出た一匹を探し出す覚悟だということです。転げ落ちたボールではなく、自ら迷い出ってしまった羊です。小さい者、もとをただせばイエスと弟子たちのそばにいた幼子、身を低くし天の国に迎え入れられる幼子の譬え話から始まっています。このような幼子を躓かせる者がいたら、極刑に処せられるであろうと。

けれども譬え話の羊は、その他の羊と比べて、何か特筆すべき性質が備わっているとは思えません。おそらく残りの九十九匹と何ら区別できない一匹の羊です。ただ、この一匹が不幸にも迷い出ているケースです。神の国に迎え入れられるはずの「小さい者（の一人）」が今、群れからはぐれて躓こうとしています。イエスが言うには彼ら（＝羊たち）の天使たちは絶え間なく父なる神の御顔を仰いでいる（＝指示を待って待機している）のです。もちろん彼らを躓かせないために。天の国とは、その人たちのもの（マタイ福音書 5：3－10）だからです。こうして天の国（神の国）の「欠員」は連れ戻されて、晴れてその国の一員となるのです。放蕩息子の帰還と同じです（ルカ福音書 15：11－32）。

父親の財産を分与してもらった息子が異国の地でそれを使い果たしたあげく、かの地で飢饉に喘ぐこととなり、猛省して父親の国に帰還し赦しにあずかったお話です。迷い出た一匹の羊、放蕩息子の帰還、この二つの譬え話はルカ福音書では連続して出てきます。どちらも喪失を痛み、神の国へと連れ戻されるべき存在（＝被造物）と神（創造主）との関係が色濃く描写されています。

神の御顔はおろか、足音さえも聞き分けたアダムとイブが楽園から追放されてからは、神の存在は人類の中のごく一部の人間にしか感知されなくなります。神の独り子の姿に接しても、神の被造物であるはずの人間の反応はもう退化していました。創造主たる神が痛感した責任の重さは計り知れません。その神の立場を、素朴に描写する譬えが羊飼いであったり父親であったりするの、ユダヤ人が集会で使用する讚美歌（＝詩篇）の中でも繰り返し歌われている父なる神を言い表す表現でした。イエスが用いる譬え話は、そうした彼らの脳裏に焼き付いたイメージを喚起するためのもの

のです。「聞く耳を持つものは聞くがよい(マルコ福音書4:9、他)」とイエスが度々言ったのはそのためでした。

21世紀の読者は聞く耳を持って、つまり読む目で追って、文字を見据えて、聖書に記された真理と出会う心構えが必要となるのです。